

原 著

## 若者カテゴリの知覚に伴って生じる若者カテゴリへの同化

The assimilation to the category of the young to arise in association with the perception of their category

大和田 智文

**要約：**本研究では、社会的アイデンティティ理論および自己カテゴリ化理論（以下、SIT および SCT）の視点に立った若者行動の理解方略が妥当であることを保証するため、若者の若者カテゴリへの同化が行動レベルで実際に生じることを検証した。その際、「若者カテゴリをより強く知覚することに伴う自己カテゴリ化によって若者カテゴリへの同化が生じるだろう」という仮説を立て、若者カテゴリの知覚（知覚、非知覚の2水準）を要因とする1要因参加者間計画にもとづく調査を実施した。大学学部生230名を対象に質問紙を用いた実験を行った結果、若者カテゴリへの行動レベルの同化は、若者カテゴリへの自己カテゴリ化によって実際に生じる現象であることが確認された。したがって、SIT および SCT の視点に立った若者行動の理解方略は妥当であると考えられた。

**Key Words：**若者カテゴリ、同化、プロトタイプ性

本研究は、社会的アイデンティティ理論および自己カテゴリ化理論(e. g., Hogg, 2006; Turner, 1987. 以下、「SIT および SCT」と記載)に従い、若者を社会的カテゴリのひとつ(すなわち、若者カテゴリ)として捉えることを前提としている。若者を上記のように捉えると、近年の若者に特有といわれるような行動(e. g., 岡田, 2007; 大和田, 2010a)なども、若者がこの若者カテゴリに同化することによって引き起こされるものとして理解していくことが可能となる。しかし、近年の若者に特有といわれるような実際の「行動」をこの若者カテゴリへの同化によって説明しようとする枠組みはそもそも妥当といえるのだろうか。本研究ではこの妥当性についての検討を行うことが目的となる。

SIT および SCT は、ある社会的カテゴリの成員との比較において、その中の誰とも異なっている完全な独自性(個人的アイデンティティ)を有する自己から、他のカテゴリの成員とは異なるが、当該カテゴリ内の他のすべての成員とは同じであるという類似性(社会的アイデンティティ)を有する自己へと、抽象レベル(認知レベル)で変動する尺度上で個人を捉えることが可能となるような視点を持っている(e. g., Hogg, 1992, 2006; Tajfel, Billig, Bundy & Flament, 1971; Turner, 1987)。この視点では、カテ

ゴリ間の差異性を最大に、かつカテゴリ内の差異性を最小にすることによって、人は自身のカテゴリの有利性を高めようと努めるものであるといわれている。他のカテゴリとの比較において自身のカテゴリが社会的により肯定的なものであれば、そこから肯定的な自己概念や自己評価を引き出せるため、人はカテゴリ間の比較を自身のカテゴリにとって有利な次元で最大限に行おうとするからである。またこのことは、当該カテゴリ内の差異性が最小化されることによって当該カテゴリ成員間の類似性やプロトタイプ性が顕在化することも同時に意味している(Hogg, 1992, 2006; Turner, 1987)。すなわちここでは、対人間・集団間行動の基礎は、他のカテゴリとの間の差異性の最大化と当該カテゴリ内の差異性の最小化による自己カテゴリ化と、それに伴う社会的比較であるとされる。つまり、人があるカテゴリの成員として自己カテゴリ化をすることが、対人間・集団間行動が生じるための必要十分条件ということである(Billig & Tajfel, 1973; Hogg, 1992)。ここで、本研究で扱う「若者」をSIT および SCT の視点で眺めてみても、「若者」を社会的カテゴリのひとつである「若者カテゴリ」として捉えることが可能になることが分かるであろう。

こうしてみると、人は「自身のカテゴリ」の外では用いられないことがないような当該カテゴリの成員に独自とみられる行動をとることにより、当該カテゴリと他のカテゴリとの間にある差異性を最大化させ、また同時に、

当該カテゴリ成員間の差異性を最小化させながら彼らに特有のカテゴリ性を高めていく過程があることが考えられる。この過程は、SIT および SCT では「同化」とよばれている。SIT および SCT における同化とは、あるカテゴリへの自己カテゴリ化によって、当該カテゴリの他成員との差異性の最小化がもたらされ、その結果、当該カテゴリにおける自他の態度や行動がともに類似してくる（当該カテゴリのプロトタイプ性を備えるようになる）現象のことであるといえよう（大和田，2010a も参照）。

このように、これまで SIT および SCT では、同化は個人があるカテゴリ性を備えるようになる過程に必然的に生じる現象として理論的に考えられてきた。よって、SIT および SCT を用いて、若者特有の行動を若者カテゴリへの同化によって説明しようとする枠組みが妥当であることを保証するためには、若者の若者カテゴリへの同化が「行動レベル」で実際に生じることを確認しておくことが必要となる。

しかし、SIT および SCT を用いた研究で、行動レベルの同化が実際に生じることを実証したものは現在のところ見当たらない。したがってこれが実証されれば、冒頭に示したような近年の若者特有の行動を理解する上でも強力な助けになろう。

これまでの SIT および SCT を用いた研究では、ある集団における自他の評価や好ましさの程度など、おもに個人の認知レベルでの同化が数多く検討されてきている。たとえば、Biernat, Vescio, & Green (1996) では、28 の特性語を用いて実験参加者自身の所属するカテゴリを評定させている。ここでは、カテゴリが自身にとって関与度の高いものになるほどそのカテゴリに対する肯定的評価は参加者自身に対する評定値に近づき、否定的評価はもっとも関与度の高いカテゴリでもっとも低くなることが示されている。特に、自己カテゴリ化を操作した場合、もっとも関与度の高いカテゴリと参加者自身の評定値の相関が強くなったことから、自身にとって関与度の高いカテゴリに自己カテゴリ化することによって同化が認知レベルで生じていることを確認できる。同様に、Mussweiler, Rüter, & Epstude (2004) では、自身と同等のカテゴリへの同化が自他評価の次元で生じることが示されている。また、Smith, Coats, & Walling (1999) では、90 の特性語に対する評定反応時間が、どのようなカテゴリを評定させるかによって変わってくることを示されている。ここでは、実験参加者と同様のカテゴリを評定させたときの方がそうで

ないカテゴリを評定させたときよりも反応時間が有意に短くなっていることから、「自身のカテゴリ」への同化が生じていることが示唆されている。

このように先行研究においては、同化を認知レベルで説明しようとする試みが盛んであるが、若者特有の行動を「若者カテゴリへの同化」の結果として捉えることの妥当性を保証するためには、これまで行われてきた認知レベルの検討に加えて行動レベルでも同化が生じることを実証する必要がある。

そこで本研究では、若者の若者カテゴリへの同化が行動レベルで実際に生じることを明らかにすることを目的とし、以下の仮説に関する検討を行っていく。

**仮説** 若者カテゴリをより強く知覚することに伴う自己カテゴリ化によって若者カテゴリへの同化が生じるだろう。

本研究では上記仮説の検証のために、若者カテゴリの知覚（知覚、非知覚の2水準）を要因とする1要因参加者間計画を想定する。若者カテゴリの知覚の操作は、若者カテゴリを知覚可能なシナリオと知覚困難なシナリオの2種類を用意することによって行う。このシナリオは、後述の予備調査を経て作成された。また、若者特有の行動として妥当と考えられる項目を24項目抽出し、これらの項目を用いて、①シナリオ中の登場人物が若者カテゴリのプロトタイプの行動をとる程度、②一般的な若者カテゴリのプロトタイプの行動、③シナリオ中の登場人物の行動と調査対象者自身の行動との一致の程度、についてそれぞれ尋ねる。このうちの①と②より得られた得点から、若者カテゴリの知覚に関する指標（若者カテゴリのプロトタイプ性の知覚の程度）を、③などより得られた得点から、若者カテゴリへの同化の生起の指標を求めることとする。具体的な手続きについては以下に詳述する。

## 方 法

本研究では、上記仮説を検討することが目的となる。大和田 (2010b)、大和田・下斗米 (2008a) では、若者カテゴリへの同化に対して、若者の用いる一人称への意味づけが異なった影響を及ぼす可能性があることや、若者の位置する集団の違いによって一人称への意味づけの程度が異なってくるということが明らかにされていた。このことから、若者カテゴリへの同化の前段階となる同カテゴリを知覚する段階においても、一人称が同化対象となるカテゴリを同化主体に知覚させるための手がかりとなっている可能性が考えられよう。したがって本研究では、

この点を考慮して実験を計画することが相応しいものとする。

そこで、本研究では若者カテゴリの知覚を確認するための手続きに、一人称による操作を用いることとする。具体的な操作については後の項で詳述する。

#### 調査対象

本研究では「若者」を社会的カテゴリのひとつとして捉えることを前提とするため、調査対象は社会的カテゴリのひとつである若者カテゴリを適切に代表するような対象である必要があった。そこで、本研究では大学学部生を調査対象とした。兵庫県内の私立大学学部生計230名を対象に、授業時間を利用し質問紙調査を実施した。

#### 実験計画

若者カテゴリの知覚（知覚、非知覚の2水準）を要因とする1要因参加者間計画を想定した。この実験計画に基づき、以下のように質問紙を構成し質問紙調査を行った。

#### 各水準の操作に関する手続き

質問紙の冒頭において、ある団体の会合でその団体に所属するメンバー「A」が別のメンバーに対して話した内容とされる自己紹介文が提示された。この自己紹介文は、読み手（調査対象者）が自己紹介をしている人物（「A」）を読み手と同一カテゴリ（すなわち、若者カテゴリ）の人物であると知覚する（あるいは知覚しない）ための操作を目的として提示されたものであった。操作方法は、自己紹介文中の「A」が用いる一人称を違えた2種類の自己紹介文を用意し、どちらか一方の自己紹介文を記載した質問紙を調査対象者に均等かつ無作為になるよう配布するものであった。ただし、上記の操作を一人称によって行う場合、性別によって使用する一人称が大きく異なるという問題が生じてくる。そこで、この問題を解決するために、本研究では男女ごとに自己紹介文を2種類用意することとした。すなわち、本手続きにおいては、男女ごとにそれぞれ2水準が設けられたことになる。水準を設ける上での具体的手続きは、以下の通りであった。

「知覚」水準の手続き 大和田（2010b）によると、男性の若者は「オレ」をもっとも標準的な一人称として捉えているという。また女性の若者は、自己の表現に相応しい一人称として「アタシ」を挙げることも多いという。そこで、これら2つの一人称を若者カテゴリに当たる若者にとってもっともプロトタイプ的な一人称であると考え、読み手に対し同じ若者カテゴリの人物であると知覚させることを意図された「A」が自己紹介文

中で用いる一人称を、男性は「おれ」、女性は「あたし」とした。また表記方法は、音読などの点でもっとも平易であるひらがなとした。

「非知覚」水準の手続き 大和田・下斗米（2006）によると、男性の若者は、「ウチ」、「ワタクシ」、「アタシ」、「ワシ」などを常用することは極めて稀であるという。一方、女性の若者は、「ワタクシ」、「アタシ」、「ウチ」、「自分の名前」などを比較的均等に用いており、使用頻度がほぼ皆無となる一人称には「ワタクシ」があるという。そのため、用いられることの極めて稀な上記の一人称は、若者カテゴリに当たる若者にとってプロトタイプ的な一人称から距離のある一人称であると考えられた。このうち、男性の用いる「ウチ」、「ワタクシ」、「アタシ」は女性にも用いられるため、若者カテゴリに当たる男性の若者にとってプロトタイプ的な一人称からもっとも距離のある男性的な一人称は「ワシ」であると考えた。しかしながら関西地区においては、この「ワシ」を比較的多く用いる若者もいるということが予備面接調査（2009年5月実施）<sup>1)</sup>より判明していた。そこで、筆者の所属大学の専任教員3名により検討を行った結果、関西地区の若者にとってプロトタイプ的な一人称からもっとも距離のある男性的な一人称は「ワテ」であると判断した。一方女性の用いる「ワタクシ」には、「ワタクシ」を用いる人物を回答者が回答者自身と同一のカテゴリの人物と知覚しないような場合であっても、この人物を何らかの理由によって回答者自身と似ているように知覚させる可能性が考えられていた（大和田・下斗米，2008b）。そこで、ここでも筆者の所属大学の専任教員3名により検討を行った結果、関西地区の若者にとってプロトタイプ的な一人称からもっとも距離のある女性的な一人称は「アタクシ」であると判断した。

以上より、読み手に対し同じ若者カテゴリの人物であると知覚させないことを意図された「A」が自己紹介文中で用いる一人称を、男性は「わて」、女性は「あたくし」とした。また表記方法は、音読などの点でもっとも平易であるひらがなとした。

前項に示した一人称（「おれ」、「あたし」）を含めたこれらの一人称を、本実験計画における若者カテゴリの知覚の操作に用いることとした。ただし、自己紹介文中の一人称のみを変化させると、自己紹介文の他の箇所と違和感が生じる場合があることが予備調査（2008年5月および2009年7月<sup>2)</sup>実施）により指摘されていたため、これらの点を解消するための工夫をあわせて行った。実

Table 1 提示された自己紹介文

<p>知覚水準（男性）</p> <p>山田太郎（仮名）です。おれは（…………）をやるのが楽しみでここに入っています。ここは、週に4回みんな集まって練習していて、おれは半分くらい参加しています。休まず来る人も結構いるけど、休む人もそれなりにいるかな…。ま、ここはそんなに厳しくもないしダラダラしてもいいし、マイペースで普通にやっつけていけるって感じです。</p> <p>そういえば、この間おれの欲しいと思ってたウェア買っちゃいました。すげえ気に入ってんすけど財布がヤバって感じです。これからもよろしく！</p>
<p>知覚水準（女性）</p> <p>山田花江（仮名）です。あたしは（…………）をやるのが楽しみでここに入っています。ここは、週に4回みんな集まって練習していて、あたしは半分くらい参加しています。休まず来る人も結構いるけど、休む人もそれなりにいるかな…。ま、ここはそんなに厳しくもないしダラダラしてもいいし、マイペースで普通にやっつけていけるって感じです。</p> <p>そういえば、この間あたしの欲しいと思ってたウェア買っちゃいました。すごい気に入ってんすけど財布がヤバって感じです。これからもよろしく！</p>
<p>非知覚水準（男性）</p> <p>山田太郎（仮名）です。わては（…………）をやるのが楽しみでここに入っています。ここは、週に4回みんなが集まって練習していて、わては半分くらい参加しています。休まず来る人も結構いるけれど、休む人もそれなりにいるのかな…。ま、ここはそんなに厳しくもないしダラダラしてもいいし、マイペースで普通にやっつけていけるという感じです。</p> <p>そういえば、この間わての欲しいと思ってたウェアを買ってしまいました。たいそう気に入っているのですが財布があぶないという感じです。これからもよろしく頼みます。</p>
<p>非知覚水準（女性）</p> <p>山田花江（仮名）です。あたしは（…………）をやるのが楽しみでここに入っています。ここは、週に4回みんなが集まって練習していて、あたしは半分くらい参加しています。休まず来る人も結構いるけれど、休む人もそれなりにいるのかな…。ま、ここはそんなに厳しくもないしダラダラしてもいいし、マイペースで普通にやっつけていけるという感じです。</p> <p>そういえば、この間あたしの欲しいと思ってたウェアを買ってしまいました。たいそう気に入っているのですが財布があぶないという感じです。これからもよろしく頼みます。</p>

際に提示された自己紹介文は Table 1 に示した。

### 質問紙の構成

質問紙の冒頭において、上に述べた自己紹介文の提示を行い、続いてこの自己紹介文を一読した上での回答を要する質問がいくつか提示された。具体的な質問内容は以下の通りであった。

登場人物が若者カテゴリのプロトタイプの行動をとる程度（質問1）「A」が、若者カテゴリのプロトタイプの行動をどの程度とると思うかについて尋ねた。具体的には、「上の文章の中で自己紹介をしているAさんは、実は本学の学生であることが以前の調査で確認されました。このAさんは、以下に示すような行動をどのくらいしそうですか？それぞれ“全くしそうもない”から“とてもしそうだ”までの7段階で評定していただき、該当する数字に○印をつけてください」という質問文が提示された。質問項目の作成にあたり、大和田(2006, 2007)において見出されていた若者の高頻度行動形態群を構成していた各項目（すなわち、若者特有の行動と報告された行動のうち、高頻度であったもの）について2名の評定者が再び評定を行い、項目として妥当と考えられる24項目を抽出した。本研究では、この24項目を若者カテゴリのプロトタイプの行動を示す項目であるとし

（以下、「若者カテゴリのプロトタイプの行動項目群」と記載）、24項目のそれぞれにつき7段階で評定させた。

一般的な若者カテゴリのプロトタイプの行動の確認（質問2）「A」が所属しているとされる大学（実は調査対象者の所属大学、という設定であった）における典型的な人物を一人イメージさせ、この人物が若者カテゴリのプロトタイプの行動をどの程度とると思うかについて尋ねた。具体的には、「今度は、本学の典型的な学生のことについてお尋ねします。いま、本学の学生の中でもっとも典型的だと思えるような人を一人だけイメージしてください……………（イメージできましたか？）今イメージしていただいた、本学の学生の中でもっとも典型的だと思えるような人は、以下に示すような行動をどのくらいしそうですか？それぞれ“全くしそうもない”から“とてもしそうだ”までの7段階で評定していただき、該当する数字に○印をつけてください」という質問文が提示された。ここで若者カテゴリのプロトタイプの行動項目群を再提示し、この24項目のそれぞれにつき7段階で評定させた。この質問は、両水準における回答の共通基準を定めるために設けられた。

登場人物の行動と調査対象者自身の行動との一致の程度（質問3）調査対象者自身が「A」と友人になった<sup>3)</sup>という想定の下で、「A」がとると想像される行動を調

査対象者自身もとる可能性について尋ねた。具体的には、「あなたは、冒頭で自己紹介をしていた Aさんと友人になったとします……このあなたの友人である Aさんが、もしも以下に示すような行動をとる場合、あなた自身もそれと同じ行動をとる可能性はどのくらいだと思いますか？それぞれ“全くないだろう”から“非常にあるだろう”までの7段階で評定していただき、該当する数字に○印をつけてください」という質問文が提示された。ここでも若者カテゴリのプロトタイプの行動項目群を再提示し、この24項目のそれぞれにつき7段階で評定させた。ここで得られた得点などから、若者カテゴリへの同化の生起の指標を求める。

その他の項目（質問4）自己紹介文全体、ならびに知覚の操作のために用いられた自己紹介文中に登場する一人称が、本来の調査意図を的確に反映するものであるかを確認するためなどに用いる項目を2つ設けた（第1項目が上記の操作チェック項目。第2項目の用途については後述）。具体的には、第1項目を「Aさんは、現代の典型的な若者に近いと思う」、第2項目を「私は、そんなAさんと似ていると思う」とし、それぞれ「1（全くあてはまらない）」から「7（非常にあてはまる）」の7段階で評定させた。

人口統計学的変数 年齢、性別、所属、現在の居住地および出身地について尋ねた。

#### 従属変数

「登場人物の行動と調査対象者自身の行動との一致傾向の高まり（後述）」を「若者カテゴリへの同化の生起」であるとし、この「同化の生起」を従属変数として用いた。

質問4の第2項目は、「A」を回答者自身とどの程度似ていると知覚できたかを確認するものであった。同化とは、あるカテゴリへの自己カテゴリ化によって、当該カテゴリの他成員との差異性の最小化がもたらされ、その結果、当該カテゴリにおける自他の態度や行動が一致してくる現象のことである。ここでいう差異性の最小化とは、当該カテゴリの他成員との間に存在する心理的な隔たりを最小化する作業を含むものといえる。たとえば、本調査の中で、回答者が「A」と自身とを似ていると評定する程度が高ければ、回答者は「A」のことを回答者と同一カテゴリにおける他成員として、両者間の差異性を小さく見積っているといえよう。したがって、当該カテゴリにおける自他の態度や行動の一致傾向を議論する上では、この心理的な差異性を同時に確認しておく必要が生じることになる。すなわち、「若者カテゴリへの同

化の生起」の指標は、当該カテゴリにおける自他の行動の一致の程度を示す得点（質問3の評定得点）と、当該カテゴリの他成員との間に存在する心理的な隔たりの程度を示す得点（質問4第2項目の評定得点）との共変関係より判断することとなる。この質問3の評定得点が高いということは、当該カテゴリにおける自他の行動がより一致していることを意味し、一方で質問4第2項目の評定得点が高いということは、当該カテゴリの他成員との間に存在する心理的な隔たりがより小さいことを意味している。

このことから、「登場人物の行動と調査対象者自身の行動との一致傾向の高まり」は、この両者の相関係数の強まりに置き換えることが可能と考え、本研究では上記の相関係数（の強まり）を「若者カテゴリへの同化の生起」の指標と定めた。

#### 調査時期

2009年7月下旬であった。

#### 有効回答

調査対象者のうち221名より回答を得たが、このうち回答に欠損箇所が多くみられた3名と、著しく年齢の離れた1名の計4名を分析より除外したため、有効回答者は217名（男性80名、女性137名）となった。有効回答率は94.3%であった。有効回答者の平均年齢は18.87歳（18歳から22歳まで、 $SD=0.96$ ）であった。なお、有効回答者のうちの2名については年齢が不詳であったが、受講者情報より10歳代後半から20歳代前半であることは明らかであった。

## 結 果

本研究では既述の通り性別によって異なった質問紙を用意していたが、本研究の目的には性差の検討は含まれていないため、以下においては男女を込みとして分析を行う。

#### 操作のチェック

まず、自己紹介文全体、ならびに自己紹介文中に登場する知覚の操作のために用いられた一人称が、本来の調査意図を的確に反映するものであったかを確認した。

このために用意された項目は、回答者が「A」を若者カテゴリの人物であると実際に知覚していたかに関するものであった（質問4の第1項目）。したがって、この項目の評定得点は、「非知覚」水準よりも「知覚」水準において高くなっていることが必要とされた。

評定得点について、水準間に差があるかを検討した結

果、知覚水準において同得点は有意に高かった（両側検定： $t(215) = 2.54, p < .05, r = .17$ ）。したがって、知覚水準における「A」は、非知覚水準における「A」よりも有意に若者カテゴリの人物であると知覚されていた。なお、各水準における当該得点の平均値および標準偏差は Table 2 に示した。

Table 2 水準ごとの各指標の平均値 (SD)

指標\水準	知覚 (n=112)	非知覚 (n=105)
質問 1C1	4.80 (0.89)	4.45 (0.87)
質問 1C2	5.54 (0.95)	4.73 (1.24)
質問 2C1	3.80 (1.14)	3.87 (1.01)
質問 2C2	4.70 (1.08)	4.80 (1.14)
質問 3C1	3.13 (1.02)	2.95 (0.93)
質問 3C2	4.36 (1.14)	4.46 (1.15)
質問 4 第 1 項目	5.29 (1.33)	4.82 (1.43)
質問 4 第 2 項目	2.76 (1.43)	2.58 (1.40)

### 若者カテゴリのプロトタイプの行動項目群の成分構造の確認

次に、若者カテゴリのプロトタイプの行動項目群がど

のような成分により構成されるかを情報を集約して確認するため、計 24 項目につき主成分分析を行った。本研究では、若者カテゴリのプロトタイプの行動項目群を用いた質問を 3 回行っているが、この中の質問 2 における当該項目群が、知覚・非知覚両水準における回答の共通基準を定めるために設けられたものであったため、質問 2 において得られた得点を用いて主成分分析（プロマックス回転）を行うこととした。

固有値の減衰状況 (10.012, 2.428, 1.329, 1.078, .989, 以下省略) と解釈可能性から、2 主成分での解釈が妥当であると判断した。そこで、主成分を 2 に指定の上再び主成分分析を行った。主成分負荷量が .45 未満を示した項目 (3 項目) を削除した上で、最終的に 21 項目について主成分を 2 に指定の上主成分分析を行った。回転後の主成分負荷量を Table 3 に示した。抽出された 2 つの主成分につき解釈を行い、それぞれ「一般的若者行動」(以下「C1」と記載)、「流行追求行動」(以下「C2」と記載)と命名した。以下本研究では、若者カテゴリのプロトタイプの行動項目群の得点を C1 と C2 に分けて分析することとする。

Table 3 若者カテゴリのプロトタイプの行動項目群の主成分分析結果 (n=217)

	C 1	C 2	共通性
C 1 : 一般的若者行動			
年上の人に対する礼儀を気につけない	.885	-.180	.816
年上の人に敬語を使わない	.805	-.102	.658
公のマナー・校則などを守らない	.794	.035	.632
道で人とぶつかっても気にしない	.761	-.173	.609
ヘッドフォンの音漏れは気にしない	.742	-.032	.552
敬語はあえて使わない	.717	-.254	.579
人をかき分けて階段を昇る	.702	-.086	.500
公共の場所 (電車やバスの中など) で大きな声で話す	.692	.079	.485
ていねいなことばをあまり使わない	.681	.107	.475
年上の人、初対面の人にもくだけた態度で接する	.665	.084	.449
大人に対しても友だちのように接する	.662	.014	.438
夜中でも大声で話す	.657	.151	.454
スピードを出して自転車を運転する	.601	.130	.378
電車やバスの中で飲食する	.544	.236	.352
ケイタイやネットに依存している	.501	.242	.310
横一列になって歩く	.477	.192	.264
C 2 : 流行追求行動			
おしゃれであろうと努力する	-.199	.889	.830
流行を上手に取り入れようとする	-.159	.820	.698
外見や容姿を気にする	.026	.808	.654
洋服や化粧品などに金をかける	.049	.777	.606
若者ことばを使う	.359	.554	.436
a	.930	.849	
主成分間相関		C 2	
	C 1	.455	

### 登場人物が備える若者カテゴリのプロトタイプ性の知覚の程度

登場人物が備える若者カテゴリのプロトタイプ性の知覚の程度に水準間で違いがみられるかを検討した。その際、「A」が若者カテゴリのプロトタイプ的行動をとる程度（質問1におけるC1の平均値およびC2の平均値）と、一般的な若者カテゴリのプロトタイプ的行動（質問2におけるC1の平均値およびC2の平均値）の各評定得点の関係をを用いることとした。各水準における各得点（平均値および標準偏差）はTable 2に示した。

既述の通り、質問2は両水準における回答の共通基準を定めるために設けられたものであった。すなわち質問2では、一般的な若者カテゴリのプロトタイプ的行動についての質問を行うことによって、両水準における質問内容が全く同一になるようになっていた。そこで質問2の評定得点に水準間で差がみられるかを検討したところ、C1、C2ともに両水準間に有意な差はみられなかった（両側検定： $t(215) = 0.47, n.s.$ ； $t(215) = 0.71, n.s.$ ）。

質問2においてC1、C2ともに水準間に有意な差がみられなかったため、「A」が備える若者カテゴリのプロトタイプ性の知覚の程度については、質問1の評定得点の素点をそのまま指標として用いることとした。すなわち、この評定得点が高いほど、「A」の備える若者カテゴリのプロトタイプ性がより高く知覚されていたこととなる。この評定得点に水準間で差がみられるかを検討したところ、C1、C2ともに知覚水準において同得点があり高いことが確認された（両側検定： $t(215) = 2.97, p < .01, r = .20$ ； $t(195.03) = 5.40, p < .001, r = .36$ ）。

以上より、登場人物が備える若者カテゴリのプロトタイプ性の知覚の程度は、知覚水準において高いことが示された。

### 登場人物の行動と回答者自身の行動との一致傾向

登場人物の行動と回答者自身の行動との一致傾向の高まり（以下、「若者カテゴリへの同化の生起」と記載）が、若者カテゴリのプロトタイプ性の知覚の程度によって影響を受けるか検討を行った。各水準における各得点（平均値および標準偏差）はTable 2に示した。

知覚・非知覚水準ごとに、当該カテゴリにおける他の行動の一致の程度（質問3におけるC1の平均値およびC2の平均値）と、当該カテゴリの他成員との間に存在する心理的な隔たりの程度（質問4第2項目の平均値）の相関係数を算出したところ、C1については知

覚水準では中程度の相関（ $r = .586, p < .001$ ）がみられたが、非知覚水準では弱い相関（ $r = .351, p < .001$ ）にとどまった。そこで、複数の相関係数の同等性の検定を行ったところ、2つの相関係数は同等ではなかった（ $z = 2.21, p < .05, r = .15$ ）。またC2については知覚水準では弱い相関（ $r = .297, p < .01$ ）がみられたが、非知覚水準では有意な相関はみられなかった（ $r = .135, n.s.$ ）。

すなわちこのことから、若者カテゴリをより強く知覚することに伴う自己カテゴリ化によって若者カテゴリへの同化が生じる傾向にあることが示された（C1については知覚水準において相関が有意に強くなり、C2については知覚水準にのみ有意な相関がみられた）。本結果では、社会的アイデンティティ理論および自己カテゴリ化理論から必然的に導かれる結果と同方向の結果が得られたため、本研究における仮説は支持されたものと考えられる。

## 考 察

本研究では、若者特有の行動を若者カテゴリへの同化によって説明しようとする枠組みが妥当であることを保証するため、若者の若者カテゴリへの同化が行動レベルで実際に生じることを明らかにすることを目的とし、既述の仮説に関する検討を行った。この仮説とは、若者カテゴリをより強く知覚することに伴う自己カテゴリ化によって若者カテゴリへの同化が生じるだろう、とするものであった。仮説を検討した結果、若者カテゴリをより強く知覚した場合に若者カテゴリへの同化が生じる傾向にあることが示され、仮説は支持されたのであった。

本研究では上記のように、若者の若者カテゴリへの行動レベルの同化は、若者カテゴリへの自己カテゴリ化によって実際に生じる現象であることが確認された。SITおよびSCTに従うと、同化は個人があるカテゴリ性を備えるようになる過程に必然的に生じる現象として理論的に考えられるものである。本研究では、SITおよびSCTにおけるこの「同化」という概念が、行動レベルで実際に生じる現象であることを実証的に確認することができた。したがって本研究は、この概念上の現象を社会的にも生じる現象として確認することができたことで、近年よくみられる若者特有の行動を理解する上に強力な足がかりを築くことができた点において意義のあるものであったと考える。

ただし、いくつかの点について議論しておく必要がある。

まず, C1 (一般的若者行動) と C2 (流行追求行動) とで, 知覚水準, 非知覚水準それぞれにおける相関の様相に若干の違いがみられた点である。一般的に流行追求行動は, 個人による差が大きく, また他の若者が取り入れているような流行にのっとった言動に対する一定の類似性を自己の中に認めた場合であっても, 実際にその流行を取り入れるかどうかという行動次元における個人差はさらに大きくなる。仮にその流行を取り入れるにしても, 類似性認知から取り入れまでの時間的経過も考慮される必要がある。加えて, Rogers (1983) のいう「イノベーター」などは, 流行の取り入れのために所与のカテゴリを離れて新たなカテゴリを先駆的に立ち上げる可能性も考えられる。であれば, この「イノベーター」を既存の SIT および SCT の枠に当てはめて議論すること自体が困難となるため, 流行追求行動の適切な理解方略に SIT および SCT は若干馴染まないのかもしれない。これに対して本研究で示された「一般的若者行動」は, 類似性の認知後即時に取り入れ可能となる傾向が大きい行動群であると考えられ, この意味でそこに個人差が介在する余地は「流行追求行動」に比べて小さくなるのかもしれない。このようなことが, 上に述べた相関の様相に違いをもたらした理由として考えられるであろう。しかしながら, この点については現時点では推測にすぎないため, 各行動タイプに着目した調査を引き続き行っていく必要がある。

次に, 若者カテゴリのプロトタイプの行動項目群の恒常性・安定性に関する問題である。心理尺度は本来, 人の恒常的・安定的特性について測定することを目的に作成されるが, 本研究で用いた若者カテゴリのプロトタイプの行動項目群ではもともとそうした恒常的・安定的側面の測定を意図してはなかった。それはこの項目群が, 近年の若者に特有と考えられる具体的な諸行動を収集した上で, それらについての実態を行動レベルで把握しようとするものであったからである。こうした行動レベルでの把握には常に時代や流行が強く影響するため, わずか数年の経過であっても同じ項目を用いての継続的な実態把握が極端に困難になることも考えられる。しかしながら, 若者カテゴリのプロトタイプ性などを測定する際には, その恒常的・安定的側面を巧みに抽出した上でデータを継続的に蓄積していくことが後の研究の発展には欠かせない。したがって, 行動レベルの検討を質問紙だけに依存するのではなく, たとえばいくつかの現実場面に即した実験状況を構成するなど, より恒常的・安定的

な回答を引き出せるような実験上の工夫も必要になるものと考ええる。

また, 本研究の調査手続きについて若干議論しておく必要がある。たとえば, 登場人物の行動と回答者自身の行動との一致の程度を評定させる際, 提示された項目がポジティブ方向, ネガティブ方向のいずれを示しているかによって, 回答者の自己評価に揺れが生じる可能性があったことが考えられる。このことから, 本項目を用いて, 質問3の中で回答者自身の行動との一致をイメージさせることには, 困難が伴う場合もあったかもしれない。

よって, 上記の諸点については, 今後よりいっそうの精緻化が望まれるところである。

#### 引用文献

- Biernat, M., Vescio, T.K., & Green, M.L. (1996). Selective self-stereotyping. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 1194-1209.
- Billig, M. & Tajfel, H. (1973). Social categorization and similarity in intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, 3, 27-52.
- Hogg, M.A. (1992). *The social psychology of group cohesiveness: From attraction to social identity*. Herts: Harvester Wheatsheaf.
- Hogg, M.A. (2006). Self-conceptual uncertainty and the lure of belonging. In R.Brown & D.Capozza (Eds.), *Social identities*. Hove and New York: Psychology Press. pp.33-49.
- Mussweiler, T., Rüter, K., & Epstude, K. (2004). The ups and downs of social comparison: Mechanisms of assimilation and contrast. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 832-844.
- 岡田努 (2007). 現代青年の心理学—若者の心の虚像と実像 世界思想社
- 大和田智文 (2006). 若者観察者の社会的アイデンティティにみる若者行動理解の諸相に関する検討 専修総合科学研究, 14, 201-228.
- 大和田智文 (2007). 若者の社会的アイデンティティにみる若者行動理解の諸相に関する検討 文研論集, 49, 11-33.
- 大和田智文 (2010a). 若者再考—自己カテゴリ化理論からの接近 専修大学出版局
- 大和田智文 (2010b). 若者における一人称の使用の様相とその機能的意味 関西福祉大学社会福祉学部研究紀要, 13, 77-86.
- 大和田智文・下斗米淳 (2006). 若者における一人称への意味づけに関する検討 (1) —社会的アイデンティティ確立のための社会的カテゴリの選択をめぐる— 日本心理学会第

- 70 回大会発表論文集, 136.
- 大和田智文・下斗米淳 (2008a). 若者らしさの表出としての一人称への意味づけ—集団に応じた意味づけの違い— 対人社会心理学研究, **8**, 89-95.
- 大和田智文・下斗米淳 (2008b). 若者における一人称への意味づけに関する検討 (5) —若者カテゴリの知覚に伴って生じる若者カテゴリへの同化— 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集, 470-471.
- Rogers, E.M. (1983). *Diffusion of innovation, 3rd ed.* The Free Press.
- Smith, E.R., Coats, S., & Walling, D. (1999). Overlapping mental representations of self, in-group, and partner: Further response time evidence and a connectionist model. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 873-882.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 149-178.
- Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory.* Oxford: Blackwell.
- (蘭千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美 (訳) (1995). 社会集団の再発見—自己カテゴリー化理論 誠信書房)

#### 注

- 1) この予備面接調査は、筆者の受け持つ 2 年次生対象の演習科目の中で受講生に対してヒアリングを行ったものである。具体的には、自身にとってもっとも身近な一人称とそうでない一人称を複数報告するよう求めた。
- 2) この予備調査は、筆者の所属大学の 1 年次生を評定者として、自己紹介文全体ならびに自己紹介文中に登場する知覚の操作のために用いられる一人称が、本来の調査意図を的確に反映するものであるかを確認するために行われた。具体的な調査内容は、本調査で用いたものと同様の、男女別計 4 パターンの自己紹介文のいずれかひとつを提示し、本調査で用いた質問 4 とほぼ同様の 2 項目によってそれらを評定させるものであった。具体的な項目は、「A さんは、現代の典型的な若者に近いと思う」、「A さんは、典型的な大学生に近いと思う」であった。評定者は、各パターンにつき 3 名ずつ計 12 名であった (男性の知覚および非知覚水準の 2 パターンについては男性評定者、女性の知覚および非知覚水準の 2 パターンについては女性評定者であった)。その結果、男女込みで分析した場合、2 項目とも水準間に有意な差もしくは有意な傾向差がみられた (両側検定:  $t(10) = 2.61, p < .05, r = .64$ ;  $t(10) = 2.18, p < .10,$

$r = .57$ ). また、2 項目とも同一水準内に男女差はみられなかった。

- 3) この「調査対象者自身が「A」と友人になった」という教示文が、直接的な自己カテゴリ化の操作であった。人が自己カテゴリ化を行う前提として、自身と類似の属性を持つあるカテゴリないしはカテゴリ成員に注目した上で、そのカテゴリないしはカテゴリ成員が自身と類似の属性を持っていることを意識的に知覚する必要があると考えられる。言い換えれば、この意識的な知覚がない場合には自己カテゴリ化も生じないことになる。本研究では自己カテゴリ化の操作チェックは行っていないが、それは上記のように、あるカテゴリないしはカテゴリ成員が自身と類似の属性 (本研究の場合「若者」) を持っているとの明白な知覚がある場合には、自己カテゴリ化の操作のための必要十分な下地がすでに形成されていると考えたからである。

#### 付記

本研究は、日本パーソナリティ心理学会第 18 回大会にて発表された。